すもももももももものうち

和泉　彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すもももももものうち

【Ｎコード】
Ｎ７５６６Ｓ

【作者名】
和泉　彩

【あらすじ】
１０年の月日を小説執筆に捧げて、西野健太は晴れて小説家になることができた。しかし、雑誌に連載した小説は、１作品目も２作品目も、人気がなくて打ち切りとなってしまう。３作品目の小説、「すもももももももものうち」は、自分の飼い猫すももがある朝、人間の美少女になっているという物語だったが、読者からの評判はすこぶる悪かった。そんなある日のこと、「すもももももももものうち」に書いたことが、現実のこととなり……？
冴えない小説家西野先生と、愛猫すももとの温かい交流を描いたス

トーリー。

第一章　西野先生（前書き）

ニルトニア物語を読んでくださった方から頂いた感想の中で、一番最初に感想をくださった方が、「短編ものを読んでみたいです」と書いてくださったので、今回、短編モノに挑戦してみました。
……結果は、惨敗です（汗）
要点を短くまとめ、簡潔な文章を書く、その才能が全くないことが、今回分かりました。
期待してくださった方、申し訳ありません＞＜
その他、色々前書きに書いておきたいこともありますが、個人のブログの方にたくさん書きましたので、ここではこのくらいにしておきます＾＾
お時間あって、興味がちょっとある、などという方は、是非ブログへいらせられませ。
ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｌｏｖｅｃｈｅｒｒｙｓ／
→がブログのアドレスです。
まだまだ、文章にしても、ストーリーにしても、至らない点ばかりですが、これからも精進していきたいと思いますので、温かく見守ってくださると嬉しいです！
質問・感想等、なんでもお待ちしております。
とても励みになります。
よろしくお願いいたします。

第一章　西野先生

暑かった夏もやっと終わろうとしていた。
まだ、道路の木々は緑色で、紅葉してはいなかったが、街ゆく人々の装いが夏物から秋物へと変わっていたり、ほほをなでる風が涼しかったりと、確実に秋の気配を感じることができるようになっていた。
そして、ここ高垣町の商店街も、今、秋の夕暮れを迎えていた。
空を見れば、秋の夕暮れ独特のサーモンピンクの空が、地平線の向こう側まで広がっている。
そんな綺麗な空に目をとめる人、買い物に夢中な中年の女性、ペットの散歩で通りすがる男性、様々な人がこの商店街に集っていたが、そこにひとり、異彩を放っている人物がいた。
彼は、上には赤とオレンジのチェックのよれよれのシャツを着て、下には、何べんも洗いすぎてしわくちゃになって、その上に色落ちして、もう元の色が何色だかも分からなくなってしまった汚い灰色のズボンをはいていた。そして、靴下ははかずに、素足で下駄を履いている。
彼の髪はボサボサで、とりあえず身にまとっている、といった体の服はところどころに虫食いの穴が開いていた。
３０代だろう、と推察はできたが、あまりに小汚い格好なので、実際より老けて見えるのかもしれない。
さらに彼は、よく聞けば何か、ブツブツブツブツ言って、少し上空にぼーっとうつろな目を向けて歩いている。
商店街に来ている人々の中で、あきらかに彼は浮いていた。
しかし、高垣町の住民たちは、彼に対してなんの注意も払っていなかった。
なぜなら、彼、西野健太、通称西野先生は、ここいらの町では、知らない人のいない有名人だったからだ。

今さら彼が、いつ洗濯したのかも分からない汚い格好で町を歩いていようとも、それが１０年前から一日たりとも違わない、必ず毎日同じ服であっても、さらには空に向かって何かブツブツ呟いていようとも、もはやそれらは日常茶飯事のことなのであった。
ああ、西野先生だわ、くらいにしか思わないのである。
先生、と住民がそうよぶのは、彼が小説家だったからだ。
しかし、有名でないからなのか、住民たちの誰一人として、彼の作品を読んだことがなかった。
というより、世に出ているところすら、見たことがなかった。
けれども西野先生は、本人自ら、「自分は小説家で、日々いかなるときでも、小説のアイディアを考えながら歩いているので、多少独り言を言っていても、気にしないでもらいたい」と言っていたので、周りの人間は、とりあえず、「西野先生」と呼んでいたのである。
つまるところ、西野先生がこの町内で有名人だったのは、小説家の先生としてではなく、いつも同じぼろぼろの格好で、ブツブツ独り言を言っている変わり者だったためだ。
敬意を払っていたのでもなく、本当に小説家だと信じていたわけでもないが、西野先生は、いつの頃からか、もうずっと、西野先生、と皆に呼ばれていた。
実際のところ、彼は嘘は言っていなかった。
西野健太は高校卒業と同時に、ここ高垣町で一人暮らしを始め、さくら出版という出版社に必ず毎年、しかも１０作ずつ１０年間、小説を投稿し続けた。
つまり、１０年の間に彼は、１００の作品を、さくら出版の新人賞に応募し続けたのである。
しかし、結果は惨敗。
大賞をとるどころか、佳作にも、さらには奨励賞にもひっかからなかった。
ただ、毎年かかさず１０作品ずつ送ってきたのを、１０年間の間審査にあたってきた一人の編集者が、「ここまで無残な結果が続いて

いるのに、あきらめない根性だけはすごい」と、彼西野健太に目をとめた。
ストーリーは、地味なものばかりで、全然世界観に魅かれないし、はっきりいえばおもしろくない。
しかし、文章力はそこそこあるし、何より全くあきらめない根性、これはすごいのではないか、と西野を認めたのである。
それ以来、その編集者の大木は西野の担当になり、彼の作品をさくら出版が出している雑誌「さくら」に連載できるように取り計らった。
しかしいくら、根性がある、といっても、１０年間何の賞も取れなかった西野の作品を雑誌に載せるのは、容易なことではなかった。
当然のことながら、編集長を始め、他の編集者の猛烈な反対にあった。
それで、雑誌に載せる広告のキャッチコピーを作ったり、他の作家陣の連載している作品のあらすじを書いたりする仕事をする、という条件付きで、西野は、雑誌「さくら」の連載作家になんとかなれたのである。
だが……最初の作品が、まだ物語の佳境にも入らないところで、あまりの読者からの人気のなさに、途中で打ち切りになった。
西野先生の次回作にご期待ください。と最後に書かれ、以後、その作品の続きが日の目を見ることはなかった。
「西野先生。次はもう少し、地味ではなくて、読者のニーズに応えて華のある話を書いてください」
担当の大木はこう言ったが、次に西野が書いてきた作品も、これまた前作以上に地味で、淡々としていて、ストーリーは起伏に欠け、起承転結と物語があるべきならば、「転」の部分が完全に欠如していて、やっぱりはっきりいっておもしろくないのだった。
当然の結果、雑誌「さくら」には否定的な感想や痛烈な批判が殺到した。
西野の2作目もわずか3章という短さで、終焉を迎えたのだった。

――――――西野先生の次回作にご期待ください。
大木は、そのラストの一文を読みながら、深いため息をついた。
（一体誰が、こんな作家の次回作を期待するのか……）
自分の目は節穴だったのかもしれない。大木自身も、西野の才能のなさを認めざるを得なくなっていた。
そして現在西野は、３作品目となる「すもももももものうち」という作品を連載していたが、これもすこぶる読者の評判が悪かった。
大木は日々、西野のことで頭を痛めていた。

第二章　一匹のさんま

そんな大木の悩みなど露知らず、西野は今日も夕暮れ時の町を散歩しながら、一人ブツブツ呟き、次の小説のネタを考えていた。
「そうだな。すももは黒猫だから、いつも黒いワンピース。首にピンクのリボンをまいているのは、変わらない……と」
「おーい、西野先生」
「それから、すももは……」
「に・し・の・せ・ん・せ――――――――」
「むむ。私に、何か用かな？」
やっと西野は歩みを止め、呼びかけた主に振り返った。
このように、西野に話しかける場合、まず彼は、自分の作品の世界に没頭しているので、大きな声で呼びとめねばならなかった。
それはさておき、西野に声をかけたのは、商店街の中で、魚屋を営んでいるおじさんだった。
「西野先生。脂ののったさんまはどうだい？　秋はやっぱりさんまだよ！！　買ってかねーか？」
「むむ。確かに秋といえばさんま。しかも本当だ、脂がよくのっている。これはうまそうだ」
「だろ？　しかも安いよ。一匹１００円」
「よし、２匹いただこうか」
「あいよ、２００円ね」
西野は無造作に灰色のズボンのポケットから財布を取り出し、お金を払おうとした。
「むむ……」
しかし、財布の中には、１８０円しか入っていなかった。
「すまない、大将。やはり一匹にしてもらいたい」
「あいよ」
魚屋のおじさんは、てきぱきとさんまを一匹ビニール袋にいれて、

西野に手渡した。
「まいどありー」
魚屋の大声を背後に聞きながら、西野は、はて困った、と考え始めていた。
西野は現在一人暮らしであるが、いや正確には一人と一匹暮らしであった。
というのは、2年前に、いつものように、小説のネタを考えながら散歩していたときに、ふと、「ニャー」という声がして、おや、と足を止めると、足元にダンボール箱に捨てられた子猫がいたのだった。
当時、彼はまだ小説家ではなく、金がなくなったら単発でバイトをし、少し金が貯まったらまた小説を書き、金が尽きたらまたバイト、という生活をしていたので、決して裕福ではなかった。むしろド貧乏だった。
着ているものだって、一着しかないから、毎日同じものを着ていたし、下駄も一足だった。
養っていけるのか？と西野はまず思ったが、真黒な小さな子猫は、西野を見つめて、懸命にニャーニャーと鳴いていた。
その大きな瞳で見つめられると、まぁなんとかなるだろう、という気になってきて、西野はその子猫を抱いて家に連れ帰ったのだった。
家にあった布の切れ端を、子猫の首にリボンのように巻いてやって、よし、今日からお前と私は家族だ。うちは貧乏だが心配するな。そのうち私は大作家として大成し大金持ちになり、お前には大トロを食わしてやる。お前……うむ、いつまでもお前呼ばわりする訳にはいかんな、そうだな、名前は……すももがいい。まぁとにかく今日からよろしく頼む、と言葉など通じているはずもない子猫に神妙な面持ちで話しかけた。
そうして、一人と一匹の生活が始まったのだった。
すももは、推定2歳になり、現在に至るが、西野は小説家になるにはなれたが、大成した、とはとてもいえず、原稿料はほとんどもら

えていなかった。
わずかな原稿料と、連載を約束してもらった時の条件である広告のキャッチコピー等の執筆料で、口に糊する超ド貧乏生活が相変わらず続いていた。
すももには、大トロ…なんてとんでもなかった。
大体大トロなんて、西野だって、生まれてから一度も口にしたことがなかった。
西野とすももの食事は毎日至ってシンプル、（貧相）だった。
茶碗一杯のご飯の上に、西野はふりかけをかけ、すもものご飯の上には、かつおぶしをかけてやる。
ただそれだけを、一日3食。
それが西野家の、毎日変わらない献立だった。
今日は、ついつい魚屋のおじさんの言葉につられ、確かにうまそうなさんまだったので買ってしまったのだが…。
問題は、懐の事情により、残念ながら一匹しか買えなかったことだ。
「うむ、困ったな」
西野は、小説のネタを考えるのをやめて、一匹のさんまをどうするか、について思案にくれた。

第三章　西野先生とすもも

「ただいま」
ガラガラと玄関の戸を開けて、西野は家に上がった。
西野の家は、築４０年の古い木造の平屋建てで、これは一人暮らしを始める際に両親からもらったお金全てを使って買った家だった。古いので、雨漏りはするし、建てつけの悪い扉は、開けるのにも一苦労するが、西野にとっては、住まいなどこれで十分であった。
言ってしまえば、雨露をしのげて、寝て、起きて、めしを食べて、小説が書ければ、それだけでよかった。
衣食住、どれをとってもド貧乏の最低な生活だったが、西野はとりたてて不便を感じていなかった。
生きるのに最低限のモノがあり、食べ物もあり、そして小説を書けるなら他に言うことはない、まぁ心配せずとも自分はいずれ大作家と呼ばれるようになり、小説も飛ぶように売れて、大金持ちになるのだから、などといつも楽観的に考えていた。
家に着いた西野は、早速さんまを焼き、ご飯を一合炊いた。
さんまが焼けると、香ばしくいい匂いが狭い部屋に満ちた。
「ニャー」
すももが、匂いを嗅ぎつけて、西野の元へやってきた。
「待て待て、すもも。まだご飯を盛りつけてからだ」
西野は、炊きたてのご飯を、半合ずつ茶碗に盛りつけて、いつも通り、自分用にはふりかけを、すもも用にはかつおぶしをかけた。
そして、焼き上がったばかりのさんまをすもものの茶碗の隣に置いてやった。
「ニャー」
「なになに、構わん。私は今でこそこんな貧乏だが、そのうちさんまなど飽きるほど食べられるようになるのだから、今日のこのさんまは、すももにやる。

遠慮などせずに食え」
「ニャー」
一人と一匹は、ガツガツ飯を食らい始めた。
「すもも、うまいか？」
「ニャー」
「そうだろう。秋はやっぱりさんま。お前もよく分かっているな。さぁ食え」
「ニャー」
そして、一人と一匹は、ご飯を残さず食べ、すももに至っては、骨だけ残ったさんまをまだ名残惜しそうになめていた。
しばらくなめ続けて、味もしなくなった頃、すももはぴょんと家の縁側に飛び出していって、西野の家の前の空地へ入っていった。
時刻はちょうど夕方の5時。
西野家の夕食が終わる頃、ちょうど夕方の5時頃になると、すももは必ず毎日欠かさず、家の前の空地へ出かけていった。
最初西野は、何があるのだろう？、と縁側から見ていたら、次々とどこからともなく猫が集まってくる。
総勢３０匹位の猫たちが集まって、何やらニャーニャー言い合っているのだった。
そうして1時間くらいすると、猫はまたどこかへ散らばって消えていき、すももも家に帰ってくるのだった。
最初西野は、この現象を一体何なのだろうと不思議に思っていたが、気になって本屋で立ち読みをして調べたら、どうやらこれは、猫の集会らしいのだった。
猫が同時刻、同じ場所に何匹も集まって、互いの情報交換をする。
これは鳥なども同様のことをする習性があり、人間でいえば、井戸端会議というか、ちょっとした集会のようなものなのだそうだ。
すももは、猫の集会に参加して、一体どんなことをしゃべっているのだろう？　自分のことを話しているのだろうか？　それとも、毎日ご飯がかわりばえのしないことに文句を言っているのか……。

すももは猫なので、言葉が通じない。
つまり、何を憶測しようとも、それはどこまでいっても、想像の域を出ない訳だったが。
（ああ、すももが人間だったらなぁ）
そう思った時、西野は突然ひらめいた。
（そうだ！　次の作品では、すももが人間になる話を書こう）
そして、その発想から書き始めた小説が、現在連載中の3作目「すももももももももものうち」である。
「すももももももももものうち」の内容をかいつまんでいえば、飼い猫のすももが、ある朝『おはようですニャ、先生起きてくださいですニャ』と主人公を起こしに来て、びっくりして飛び起きた彼の前には、１０代の美少女が座って彼を見下ろしている。
『だ、だれなんだ、君は』
『誰だなんてひどいですニャ。あたしはすももですニャ』
『いや、すももは猫であって、人間ではない』
『先生と会話がしたくて、すももは人間になりましたですニャ』
『そうか、うむ。そうだったのか。実を言うと私も、すももが人間であったらよかったのに、と思っていたところだったのだ。これはちょうどいい』
などという、なんともご都合主義なやり取りがあり、一人と一匹は、二人になって生活をする、という物語である。
これは現在3章までいっているが、元ネタが西野とすもものド貧乏生活なので、小説になっても大筋は変わらず、やはりストーリーの起伏が全くなかった。
まぁ、はっきりいってしまえば、おもしろくなかった。
唯一違うことは、すもものがある朝、猫から人間に変わることだが、それ以外は、例えば、二人の食事は、ご飯の一合を半分にして、主人公はふりかけをかけ、すももはかつおぶしをかけて食べる、といった具合に、ひたすらつまらない日常が描かれているだけの小説である。

大木は、「猫がある朝、美少女に変身する、というアイディアはとてもいいです。萌え要素があると思います。それを活かして、冴えない主人公と恋愛ちっくになったりとか、ドキドキしたり、そうですね、ちょっとえっちっぽく、お風呂シーンなんかいれたりして、萌え系小説にしましょう！」

と言ったが、西野は、すももは風呂嫌いだから風呂には入らないし、そもそも家族なので、恋愛関係などなるはずもない、と大木の案をにべもなく断った。

その結果、ネコ少女、という萌え要素は一切活かされず、主人公とすもものどこまでも貧乏な生活だけが描かれているのである。

第四章　まさかの宣告　その１

猫の集会から戻ってきたすももを膝に乗せて、なでてやっていると、さんまを買う前に空想していたことを思い出した。
「そうそう、すももが少女になったことをすぐ受け入れる、というのは、いささかご都合主義だったな。
それで、すももは、真黒な猫だから、真黒いワンピースを着ていて、首に巻いていたピンク色のリボンは、人間の少女になった際にも常に首に巻いていることにしよう。うむ。こうすることで、猫の時のすももと人間になった時のすももに共通点ができて、読者はすんなり、すももが人間になったことを受け入れられるな……」
西野はブツブツ呟きながら、早速思いついたネタを、ノートに書きとめていった。
黒猫と黒いワンピース、常に首に巻いているピンク色のリボン、これだけ加えただけで、読者がすんなりすももが人間になったことを受け入れられる、と想像するあたり、あまりにも安直である。
西野はやはり、物語を描く才能がないのかもしれなかった。

＊＊＊

次の日、出来上がったばかりの「すももももももものうち」の第四章の原稿を、担当の大木が取りに来た。
黙って西野が書いた小説に目を通し、２０分ほどかけて読み終えると、開口一番こう言った。
「西野先生、これはもうおもしろくないとか、そういうことを言っても意味がないので、持ち帰りますけど、もう、この続きは書かなくていいですから」
淡々と告げる大木に、西野は、またこうなったか、とがっくり肩を落とした。

「打ち切りですか……」
「いえ、打ち切りだけじゃないです。この原稿を最後に、さくら出版を首です」
大木の言った言葉の意味をすぐには理解できなかったので、西野はしばらくの間、黙って大木の顔を見つめた。
「…ええと、その首、というのは？」
西野が尋ねると、大木はすでに決まった事実として淡々と告げた。
「つまりは、もううちの出版社からは、先生の作品を出せないということです」
今回の原稿の出来がどうだったとしても、もう西野の作品はうちからは一切出版しない、それが前もって編集長に大木が言い渡されていたことだった。
「首……打ち切りだけじゃなくて……次もなくて……」
ブツブツ西野は呟きながら、徐々に自体が最悪の展開を迎えたことを理解した。
「ちょっと待ってください！！　次、次こそは必ずおもしろいの書きますから！　次を書かせてください」
「なんと言われても無理なものは、無理です。これ、最後の原稿料になります、お受け取りください。今まで御苦労さまでした。それじゃ……」
「ちょ、ちょっと！　いやそれはあんまりにもあんまりじゃないですか……」
立ち上がりかけた大木に、すがるように西野が言うと、今まで淡々としていた大木は語気を荒げて言った。
「あのですね、じゃあこの際、はっきり言わせてもらいますけども、あなたの飼い猫が人間になって、それ以降延々二人のつまらない日常が描かれている作品、誰が読みたいと思いますか？　そんなものニーズがないんですよ！　ニーズが！
あなたにはがっかりさせられましたよ。あなたの根性はすごいと思って、編集長に推しましたけども、さすがにもうあなたの小説には

先がない。
誰もこんな小説、読みたくないんですよ！」
そう言い捨てると、ガラガラ、ピシャ、と玄関の扉が閉まる音がして、大木は帰っていった。

第五章　まさかの宣告　その２

大木が帰ってしまった後も、西野は茫然として座ったままだった。
机の上には、最後の原稿料の封筒が置かれていた。
時間が、１時間、２時間と過ぎても、西野は全く同じ姿勢のままで、座っていた。
途中、すももが心配そうに「ニャー」と寄ってきたが、西野の目にも耳にも、すももの存在は入ってこなかった。
西野の頭の中は、もう自分は小説家ではない、これから一体自分はどうすればいいのか、ただひたすらそのことだけがぐるぐる回っていた。
元よりド貧乏な彼は、お金の心配をしているのではなかった。
そもそも、さくら出版からもらえていた原稿料など、本当にわずかなものだった。
彼が一番ショックだったのは、小説家でなくなったこと、そのものだった。
西野は、物心ついた頃から、何かしら文章を書くことが好きで、いつしか自分も作家になりたいと夢描くようになっていた。
高校を卒業したのを機に、執筆に専念できるよう、一人暮らしを始め、衣食住全てを最低限にして、それ以外の全てを小説一筋に打ち込んできた。
１０年で、１００作品。
彼はひたすら物語を書いた。
今年こそは…と期待して、でも結果だめで、そうしてまた書いて…。
それを延々１０年繰り返して、やっと夢叶い、彼は小説家になった。
（なったのに……）
彼は記憶にある限り、泣いたことのない楽天的性格の持ち主だった
――――――が、今、彼の両目からぽたぽたと涙が落ちていた。

「ニャー」
すももが、西野の頬をなめ、涙をぬぐってくれたことに気づいて、西野は初めて、自分が泣いていたことに気付いた。
悔しいのか、悲しいのか、自分が不甲斐ないのか、どうして泣いているのか分からなかったが、ただひとつ言えるのは、小説家でなくなったということが、いいようもないどん底に突き落とされたような気持ちにさせていた。
「ニャー、ニャー、ニャニャニャ、ニャー」
珍しくすももが、何かを訴えたいように、たくさん鳴いている。
それは、すももなりに必死に西野を励ましているようであった。
「うん…うん…そうだな。もう一度小説家になればいいのだな。なに、案ずるな、すもも。次こそは、大作家になって、大トロを腹いっぱい食わせてやる。
…だが、まぁ、さすがの自分もこれは落ち込んだ。頑張っても、頑張っても、報われないことも……あるんだろうか……。
うむ。しかし…などと愚痴をこぼしても始まらんな。すももに言葉が通じる訳で無し…。
すももが人間だったらなぁ」
西野は、すももの艶のある黒い毛を愛おしそうになでた。
風呂嫌いのすももは、一度も風呂に入ったことがなかったが、黒い毛並みは、いつもつやつやとしていた。
「明日からまた頑張るから…今日は、今日だけは、ゆっくり休んでいいだろうか…。今日くらいいいかなぁ、なぁ、すもも」
西野は、すももには申し訳ないと思ったが、ご飯を食べる気にもなれなかったので、早々に布団を敷いて、眠りについた。
すると、すももがいつものように、ごそごそと西野の布団にもぐりこんできた。
（あったかい）
落ち込んだ心を、すもものぬくもりが、温めてくれるようだった。

第六章　起きたらオドロいた

「おはようですニャ。先生、起きてくださいですニャ」
「んー、まだ寝ていたいぞ。ムニャムニャ……」
「先生！　昨日すももは、ご飯抜きにされたのですニャ。お腹が減ってたまらないのですニャ。早く起きてご飯にしましょうなのですニャ――――――」
「あぁ、分かった、分かった、ご飯を作ってって……え――――――っっ！！」
翌朝、誰かに起こされて目覚めた西野は、まだ夢の中にいるのかと、目をごしごしこすった。
なぜなら、西野の布団の横に、彼を見下ろすようにして座っている美少女がいたからだ。
我が家にそんな女の子いるワケがない。
まさか、不法侵入とか、こんなボロ家にあり得ないだろうし。
西野は、まだ自分が夢の途中にいるのだ、と思った。
なので、
「うむ。自分は小説家をクビになったのがショックで、こんな幻覚を見ているのかもしれない。もう一度寝よう」
と、布団をかぶって横になった。
しかし、その少女はなんと、横になった西野の上に、乗っかってきた。
「もう一度寝よう、じゃニャいのですニャ。すももはお腹が減ったのですニャー」
その重さは、幻覚でも夢でもないことを知るのに、十分だった。
夢でも幻でもない、現実の人間の重さだった。
がばっと起きた西野は、再びごしごし目をこすって、少女を見つめた。
真黒なワンピースを着ていて、首にピンクのリボンを巻いている。

あれ？　これって、自分が書いた小説の……
「も、もしかして……？　すもも？」
大声をだした西野に、すもも？と思われる少女はこくりとうなずいた。
「だからさっきからそう言ってますニャ」
「え――――――――！！」
朝から、狭い西野家に、西野の叫び声が響き渡った。

第六章　起きたらオドロいた（後書き）

この章から、愛猫すもものの「ニャーニャー言葉」が始まります。
読んでいても、読みにくいと思いますが、書いていても大変でした
……。

第七章　すももが人間になった理由

「えーと、すもも……すももさん？　今日もかつおぶしご飯になりますけど、よろしいですか？」
西野はすももらしき少女に、いつものお茶碗を差し出した。
茶碗には、半合のご飯が盛りつけてあって、その上に、かつおぶしが踊っている。
「いつものように、すもも、とよんでくださいですニャ、先生。それからすももは、このかつおぶしご飯大好きですのニャ」
人間になったすももは、にっこり笑って、かつおぶしご飯を食べ始めた。
箸を使って食べるのに慣れないせいか、ぽろぽろとご飯をこぼしながら。
「こんな貧相な食事ですいません、すももさん、いえすもも」
「ニャにを言いますか、先生。今はこんなド貧乏ニャわけですが、先生はいずれ大作家にニャって、大金持ちにニャるお人。そうしたら、大トロというのも、食べ放題ニャのですニャ。それを考えたら、今は辛抱の時！ニャのですニャ。…まぁ、3軒隣のライムちゃんは、ネコ缶のしらす味とか、かつお味が最高ニャとか、いつも言っているのですが、すももは、そんニャものいらニャいのですニャ。いつか大トロを食べれると思えば、別にネコ缶とか、見たこともニャいですけど、しらす味だのかつお味だの言われても、全然羨ましくないですニャ。むしろ、すももの方が実際かつおぶしを食べている分幸せニャのですニャ」
「……あの、今度ネコ缶、買ってきますんで、すみません、しらす味とかつお味ですね」
（猫の集会で、やっぱり食べ物の話してた……。しかもなんかすもも…思ってた性格と違う…。なんていうか、さりげなく欲しいものをアピールしてくる）

目の前の少女が、すももかどうかはおいておいて、西野は圧倒されて萎縮していた。
「いや、先生、もうすももは猫ではなく、人間にニャったのですニャ。ネコ缶は、ネコが食べるもの。すももは食べませんニャ」
すももは、右のてのひらをぐっと前に出して、西野の提案を断った。
「は、はぁ…。それで、えーとすもも…は、何で人間になったのでしょうか？」
それは、猫がある朝突然人間になる、という信じられない現象において、何より真っ先に知りたいことだった。
（あーでも自分の小説では全然そのことに触れてなかった…。今思えば、ご都合主義だったな）
と、こんなときでも、自分の小説について反省してしまう西野であった。
「先生は、普通の猫が、化け猫にどうしてなるのか、ご存じですかニャ？」
ことり、と茶碗をおいて、すももは話し始めた。
「確か、１００年猫が生きると、化け猫になるんでしたっけ？ていうか、あなた化け猫なんですか？　あれ？　でもすももはまだ２歳のはずで……」
「その通りですニャ。１００年生きた猫は、化け猫になるのですニャ。もちろん、すももは化け猫じゃニャいです。例え話ニャのですニャ」
そこですももは、湯呑みに入ったお茶をすすった。
そして、思ったより熱かったのか、「あつっ」と叫び声をあげた。
（ネコ舌…なんだろうか……）
「ま、まぁともかく、ニャに事にも、ニャがい年月をかけたり、一つのモノに熱い情熱ささげ続けることで、本来のあるべき姿から、違う姿に変わることがある、ということが言いたいのですニャ」
「はぁ…。よく意味が分からないのですが？」
「つまり、先生は１０年以上ものニャがい時をかけて、小説という

モノに情熱を注いできましたニャ。それによって、先生の小説には魂が宿ったのですニャ。その結果として、「すもももももものうち」という小説に書かれたことは、全て真実にニャったのですニャ」

すももは、うむうむと、納得したように何度もうなずいた。

「それは、例えるなら、長年愛用した品に魂が宿るという、つくも神的なことですか？」

「良い例えですニャ。まさにその通り、ニャのですニャ」

つまり、すももが言いたかったことは、西野は１０年以上もの月日を小説創作ということだけにただひたすら情熱を捧げてきた。

その結果、「すもももももものうち」という小説に書いたことが、現実のものとなってしまった。

（うん…そういうことか……なるほど）

「ってえ――――――！　マジでかァァァァァァァァ！！」

第八章　西野先生の妄想

とりあえず、西野は新しい小説を書くことにした。
確かに、すももが人間になったことは、驚くべきことで、まずどうしようか考えたが、結論を言ってしまえば、どうしようもないのだった。
現実、すももは人間になった。
それはもう、動かしがたい事実としてそこにあり、受け入れるしかなかったのだ。
だから、本来の目標である、再び小説家に返り咲くため…と新しい作品を書こうとしてみたのだが……。
なぜか、執筆作業がはかどらない。
普段の西野であったなら、一度自分の世界に入り込んでしまうと、周囲がどんなにうるさかろうと、ものすごい集中力で小説を書いたり、ストーリーを練ったりするはずであった。
（これは困った…）
西野が考え込んでいると、
「先生、お茶が入りましたニャ」
にこにことすももが、湯呑みを差し出してきた。
「うむ。ありがとう」
西野は礼を言って、お茶をすすった。
（超ぬるい……）
昨日出したお茶、熱すぎたんだ…。猫舌なだけに…。
と、そんなことはさておいて、そう、執筆に専念できなかったのは、すもものことが無視できないというか、小説執筆に専念しようとしても、ついついすもものことが気になってしまうせいなのだった。
高校卒業してからというもの、女性関係には全く縁がなく、西野の恋人は小説だと言ってさしつかえなかった。
そんな小説だけにしか目を向けていなかった超絶純情青年西野の前

に、突如現れた美少女（元ネコ）
西野だって２９歳の男である。
そばに１０代くらいの美少女がいれば…。
その存在が気になって仕方がないのは、誰も責められないだろう。
（いや、すももは元々は猫なんだぞ）
などと言い聞かせてみても、艶のある黒髪、ふっくらとした胸、ワンピースからのぞいている太もも……全て実際生きている女の子と何の変わりもなかった。
西野は、すももを見るたび、ドキドキしていた。
（ダメだ。これじゃあ全然小説が書けない）
西野は頭を抱えた。
「先生、根の詰めすぎはよくニャいですニャ。もうすぐお昼ですし、ご飯にでもしたらどうですかニャ？」
「そうだな。それじゃあご飯を作ろうか」
そう言って立ち上がりかけた西野を、すももが制した。
「先生はどうぞ、執筆を続けてくださいニャ。ご飯ならすももが作りますニャ」
「う、うむ。そうか。なら任せた。作り方は…」
「言わなくても知っていますニャ。先生が毎日ご飯を作る姿、見ていましたからニャ」
「う、うむ。そうか」
すももは台所に立ったが、西野は相変わらず筆が進まず、自然とすももを目で追っていた。
（女の子に食事を作ってもらうなんて初めてだなぁ。あぁ、エプロンとかかけてもらって、肉じゃがとか作ってもらって……）
別なことの空想、（妄想）ばかり、広がっていた。
「先生！」
「あ！　はいはい、何かな？」
「先生のご飯にかける『のりたま』がもうありませんニャ。どうしますかニャ？」

「じゃあ悪いが、商店街のスーパーで買ってきてもらっていいだろうか？
えーと、お金は、と…」
昨日、大木が置いていった原稿料の入った封筒があったのを思い出し、それを開けた。
（……）
中には、１０００円しか入っていなかった。
のりたまは、２００円だったから買えるが、それを買ってしまったら、もう残りは８００円しかない。
確か、米ももう残りが少なかったはずだ。
（ど、どうしよう…）

第九章　西野先生の思いつき

今は小説執筆を何より優先させたかったが、これだけのお金では、生活ができない。
（バイトするしかないか…）
そこまで考えた時、ふっとすももが朝言っていたことが、脳裏によぎった。
『「すもももももものうち」という小説に書かれたことは、全て真実になったのですニャ』
と、いうことはだ、「すもももももものうち」の続きに何らかのお金が入ってくる手段を書けば、お金が入ってくるのではないか？
確証はなかったが、試してみるだけ試してみよう、くらいの軽い気持ちで、西野は早速、もう続きを書くことはないだろう、と本棚に閉ってしまった「すもももももものうち」を取り出してきた。
（お金が入ってくるようなことを書くんだ）
そう思ってみたが、次の日起きたら、郵便受けに１００万円が入っていました、とかいうのは、あまりに非現実的すぎる気がした。
仮にそれが事実となったとしたって、なんだか人生にズルをしている気がする、と西野は思った。
そういうやり方は好きじゃない。
小説の中にあって、不自然ではなく、かつ自分がバイトせずに済む方法…。
（あっ…そうか）
西野は思いついたまま、小説を書いていった。
『先生、すももは居候にニャりたくニャいので、商店街のパン屋でバイトすることにしましたニャ』
『そうか。それは気を遣わせてしまってすまない、すもも』
『いいえ、先生は大作家にニャるお人ですから、バイトなんていう雑務はすももにお任せくださいニャ。先生はただ小説を書くことの

みに専念してくださいですニャ。そうしていつか立派な作家になって、すももに大トロを食べさせてくださいですニャ』
『すもも…なんて健気な子なんだろう…。
よし、分かった！　すももいつか必ず大作家になって、大トロを二人で飽きるまで食べようじゃないか』
『はい、先生！』
すももと西野は、ひし、と抱き合った。
（ウン、こんな感じかな…）
いや、ていうかコレ、すももに金稼いでもらって、自分ヒモになってんじゃん、自分ダメじゃん。
これこそ、人生ズルしてなくね？
とかも思ったりしたが、いやいや、すももが家にいたのでは、執筆がちっともはかどらない、どのみちすももには、外に行ってもらった方がありがたいのだ。
だとしたら、どうせ外に出てもらうなら、お金を稼いでもらった方が効率的なんじゃないかな、ウン。
などと、身勝手に決めつけて、西野は「すもももももももものうち」を閉じて、本棚へ戻した。
すると台所にいたすももが突然、「パン屋でバイトすることにしましたニャ」と言い出した。
西野は驚いて、本棚にしまったばかりの「すもももももものうち」に目をやった。
（すごい……。やっぱり、「すもももももものうち」に書いたことは、全て現実になるのか！）
すももは、先程小説に書いたとおりの言葉を、一言一句全て間違いなく口にしていった。
（あれ？　全て書いた通り、ということは……？）
西野があることに思い至った時、それと同時にすももにぎゅっと抱きしめられていた。
西野は、顔が真っ赤になるのを感じた。

（こ、こんなことも、現実になってしまうのか…）
では、すももの着ているものを脱がせたりとか、もっとえっちなことをさせたりとか…。
そんなことを想像して、西野はぶんぶん首を振ってその空想、（妄想）を打ち消した。
これじゃ、担当の大木が言っていたような、萌え萌え小説じゃないか！
しかもそれは、もれなく現実のこととなってしまう訳で……。
（イカンイカン）
西野は頬をバシバシ叩くのだった。

第十章　その日の終わりに

その日の夕方、パン屋のバイトを終えて帰宅したすももに、西野は「お給料もらえた？」と尋ねてみた。
しかし、「パン屋は月給制ニャので、今日はもらえなかったですニャ」とすももに言われ、しまった、と後悔した。
西野が今までやってきた単発のバイトは、全て日払いのバイトであった。
そこまで指定しなかったのが悪いのだが、「すもももももものうち」には、実現してほしいことは、細かく指定して書く必要があるのだ、とひとつ理解した。
早速西野は、『次の日から、パン屋の主人は日給制に変えてくれました』という一文を小説に付け加えた。
（我ながらセコイな…）
と少し思ったが、背に腹は代えられない。
日中すももがいないおかげで、すももに気を取られることなく、新しい小説にとりかかれていることもよかった。
以前のように、執筆に没頭して、周囲のことも気にならなくなっていた。
すもものことが全く気にならないといえば、ウソになるが、やはりそれよりも一日でも早くまた小説家になりたい、という気持ちが勝った。
その日は、夜遅くまで小説を書き続けた。
アイディアをひねり出し、書いて、もう一度最初から読み返しては、文章のつながりがおかしなところを消し、また次のアイディアを考えて…と何度もそんな作業を繰り返していく。
最初にラストまでの全てのストーリーを考えて、プロットを立てて〜、というやり方をすることもあったが、どちらかといえば、大まかな流れだけを考えておいて、その場の勢いでキャラ達にストーリ

ーを動かしてもらうようなやり方を西野は好んだ。
ラストさえも決めずに、登場人物を実際動かしてみて、彼らが、彼らの意思でもって動いた結果、こんなラストを迎えた、というような書き方だ。
とまぁ、小説談義はこのくらいにして、そろそろ寝よう、と布団にはいると、なんとすももまでもがもぐりこんできた。
「ちょ、すもも。それはマズイんじゃないかな、ウン」
「いつもこうして寄り添って寝ていましたニャ。こうすると暖かいですニャ」
確かに、毎晩すももは西野にくっついて寝ていた。
猫は寒いときは、一番暖かい場所へ行く、というから、この家の中で、西野の布団の中、さらに西野とくっついた状態は、一番暖かいのだろう。
西野自身だって、寒い冬場は、暖房器具の一切ないこの部屋において、すももの体温で暖を取っていたこともあった。
しかし、今のすももはネコではない。
人間の、しかも美少女なのである。
「布団は一枚しかないから、出ていけとは言わないけど、ちょっと距離を取ってもらいたいのだが」
「ニャんでですかニャ？　距離を取ったら、寒いですニャ」
そう言って、すももはもっとぴったりと西野にくっついてきた。
すももの胸が、西野の背中にあたる感触がした。
「すっ、すもも！　あ、あの、背中に、そ、その…」
心臓が破裂しそうにドキドキしながら、やっとそう言うと、すももからの返事はない。
かわりに、すぅー、すぅーという寝息が聞こえてきた。
（ドキドキしているのは自分だけで、すももにとっては、こんなに密接していることも日常の一部、というわけか）
すももは猫であったときと何も変わらないのだ。
（そりゃそうだ、すももはすももだ）

そう思い至ると、西野は急に気が抜けた。
そして一人、ふっと笑った。
秋も深まってきた今宵の寒さに、すももの温もりは普段と何も変わらず、なんとも心地よいのだった。

第十章　その日の終わりに（後書き）

＊ご報告＊

活動報告を更新いたしました。

第十一章　二匹のさんま

次の日すももは、昨日より一時間ほど遅く家に帰ってきた。
「バイトが長引いたのかい？」
西野が尋ねると、すももは持っていたビニール袋を西野に見せた。
「今日はお給料がもらえましたので、そのお金で以前食べたさんまを買ってきましたですニャ。早速今から焼きますから、待っていてくださいですのニャ。
ああ、それと、今日のお給料、さんま二匹分を引いて、４８００円になりますニャ」
すももは、ごそごそと袋の中から、お金を取り出して西野に差し出した。
「え？　何で、さんまを？」
お金を受け取りつつ、西野は浮かんだ疑問を口にした。
「ですぎた真似をして申し訳ないですニャ。でも、以前先生がくれたさんまがあまりにおいしくて、味が忘れられなかったのですニャ。だけど……いいえ、だからこそ、今度は二人で食べたかったのですニャ」
そう言ってにこにこ笑うと、すももはさんまを大事そうに抱えて、台所の方へ歩いていった。
その瞬間、西野はぎゅっと胸が締め付けられるような、苦しくて、何ともいたたまれない気持ちになった。
（…あの時、そう一匹しかさんまが買えなかったあの日、すももはただおいしそうに食べているだけのように見えたのに……そんなことを考えていたのか）
そこまで思い至ると、後悔の念がどっと押し寄せてきた。
（ごめんなさい…すもも…ごめんなさい）
西野は急いで部屋に戻り、本棚にあった「すもももももものうち」を取り出した。

そして『すももはパン屋のバイトを辞めました』と急いで、乱暴に書き加えた。
（なんで自分は、こんな簡単なことに気付かなかったんだ！）
西野が自分を責めていると、『すももはパン屋のバイトを辞めました』の一文が、にじんでぼやけて見えた。
なぜだろうと思ってみると、いつしか自分は泣いていて、その涙で文字がにじんでいたのだった。
生まれてからほとんど泣いたことなんてなかったはずなのに、すももが人間になってから、自分の心はおかしくなってしまったようだ。
（いや、違う）
おかしくなったのではない。
ひたすら小説に打ち込むだけの生活は、西野の心に何一つ感情の起伏を呼び起こすものではなかった。
だが、すももと会話したり、すももの取る行動を見たりするうちに、彼が忘れていた感情が揺さぶられ、結果、泣いたり、笑ったり、また時にはドキドキしたりしていた。
こんなふうに、人の心は動くものだということを、彼は知らなかった。
でもきっとこれが、本来の人間の姿なのだろう。
心から笑ったり泣いたり、感情が揺さぶられとことのない人間が、そもそも、人の心を動かす小説など、書けるはずもなかったのだ。
ただひたすら文字を機械のように書き殴っていただけでは、たとえ１０年以上の年月をかけようとも、誰かの心を打つような物語など紡ぐことはできないのも当然のことだ。
西野の小説に足りなかったのは、華でも、面白みでもなく、人の心だった。
――――そう、すももが教えてくれた。
「先生、ご飯ができましたニャ。ジャジャーン。今日はさんまもありますニャ！」
すももが台所から、二人分の茶碗と、焼きたてのさんま二匹を運ん

できた。
はっと我に返ると、今まで気づかなかったが、狭い部屋にはさんまの焼けたおいしそうな匂いが満ちていた。
「いっただきますニャー」
「いただきます」
すももとふたり、ご飯を食べ始めると、すももが西野の顔を見て、おや、という怪訝な顔をした。
「先生、さんま、おいしくニャいのですかニャ？」
「いや、すごくうまい」
「じゃあ、どうして、ニャいているのですかニャ？」
「うむ。おいしいときも、うれしいときも、人間は泣くのだ」
「ニャるほど。人間とはニャんとも奥が深いんですニャー」
口をもぐもぐさせながら、すももはうなずいた。
もしかして、すももが人間になったのは、人の心は動くものだということ、そして西野の生活と小説には、それが欠けているということを気付かせてくれるためだったのではないだろうか。
もし、自分が１０年以上の年月、日々努力してきた褒美をもらったのだとしたら、きっとそれこそが褒美なのだ。

第十二章　西野先生の決意

次の日から、西野は午前中のみ、近くのスーパーでレジ打ちのバイトをするようになった。
そして、午後からは小説を書く。
しかし、今まで書いていた小説は、「すもももももものうち」を除いて、全て破って捨てた。
新たに、すももが教えてくれた大切なことをテーマとして、すももとの笑いあり涙ありの日々を書きとめていった。
それが最終的に小説、という形態になるのかは分からないが、（今の段階では、メモ書きのような体であった）、今の自分に必要なことは、小説を書くことではなく、この一日一日流れていく時を、なるべく漏らすことなく記録しておくことのような気がしたのだ。
（それがきっと、今後の小説に活かされるだろう）
なんとなく、そんな気がしていた。
そんな毎日を送っていたある日の午後、西野はすももが5時近くになると、必ず縁側に足を抱えて座っていることに気がついた。
どうしたんだろう？　とすももの視線の先を追うと、家の前の空地に、ぽつりぽつりと猫たちが集まってきているのが見えた。
（あぁ、そうか。夕方恒例の猫の集会か）
すももはこのところ毎日、縁側から猫の集会を眺めていたのだった。
猫であった頃は、すももも毎日かかさず参加していた集会である。
もしかして、すももは、集会に行きたいのだろうか？
「すもも、猫の集会に行きたいのだろう？　行ってこればいいじゃないか」
そう呼びかけると、すももは寂しそうに笑った。
「もうすももは猫ではニャいのですから、集会に行っても、みんニャがニャにを言っているのか、分からニャいですニャ」
「……」

西野は、何と声をかけたらいいのか分からなかった。
西野が沈黙したのを気遣ってか、あわててすももは笑って言った。
「ニャに、そのかわりに、先生と言葉が通じあったのですから、よかったのですニャ」
しかし、本当は猫の集会に行きたいこと、西野のことを気遣ってそう言っているだけのことは、いくら鈍感で人の気持ちに疎い西野であっても痛いほど分かった。
（うむ……）
西野は一人決意を固めると、もうしばらくずっと本棚にしまいっぱなしだった「すももももももものうち」を取り出した。
そうして、その小説のおそらくラストになるであろう一文を、ゆっくりと書き加えた。

『次の朝、すももは元の猫に戻っていました』

（これで良い）
明日の朝にすももは、何事もなかったかのように、普通の猫に戻っているだろう。
寂しくないといったら、それはもちろん嘘になるが、もうすももに頼らなくても、大事なものはしっかり見えているし、二度と見失わない、という自覚があった。
すももからの贈り物は、もうすでに、西野の心の一番奥深いところに届いているのだ。
「ありがとう、すもも」
「ん？　ニャんですかニャ？」
「なんでもない」
猫であったときと変わらない大きな丸い瞳をくるくるさせて、不思議そうな顔をする、愛くるしいすももを西野はじっと見つめた。
いっときの間でも、人間であった頃のすももを生涯忘れないように、その姿を目に焼き付けておくために。

エピローグ

あれから一年の月日が経った。
すももは、予想通り、「すももももものうち」にラストを書いた翌日に、猫に戻っていた。
もう西野がなんと呼びかけても、すももは「ニャー」としか言わないが、人間のすももと過ごした日々は、全く色褪せずに、心の中に残っている。
「今夜はさんまにしようか、すもも。悪いなぁ、大トロはまだ……」
と、すももに話しかけていた時、ピンポンと玄関のチャイムが鳴った。
「はーい」
西野は急いで、玄関に走っていって、扉をガラガラと開けた。
「あのぅ、こちら、西野健太様のお宅でよろしかったですか？」
そこに立っていたのは、見知らぬ４０代くらいの男性だった。
「はぁ、そうですけど。どちらさまですか？」
「いやぁ、西野様のお宅はお電話がないものですから、直接お伺いに参ったわけです。
申し遅れました。私、みどり書房の橋本と申します。
西野様の投稿された『すももがくれた贈り物』が第１７回のみどり書房小説家大賞に選ばれました。おめでとうございます！」
「……え、本当、ですか？」
西野は驚いて、すぐには信じられなかった。
「えぇ、本当です。私も審査員の一員として、作品を読ませていただいたのですが、すももという少女がまるでそこに生きているかのように錯覚するほど、リアルな描写がまず、私たち審査員の目を引きました。それから、すももとの生活が実に微笑ましく、暖かなストーリーとなっていて、心に沁み入ってきました。
確かに、何か奇抜な出来事が起こる訳ではないのに、平凡な毎日の

中にここまで読者を引き込むというのは、中々できるものではない、きっと、その毎日の中に、何かとても大切な宝物でも隠れているのじゃないかと……」
橋本、と名乗った男は、興奮冷めやらぬ様子で、西野の小説について語りだした。
それは、こそばゆくはあったが、同時にうれしいものでもあったから、もっと聞きたいと西野は思った。
なので、
「まぁ、とりあえず中へおあがりください。何もないですが」
と、橋本を家の中へ招き入れた。

＊＊＊

橋本がひとしきり西野の小説を称賛して、今後のことなどを話して帰っていった後、西野はすももに向き合って話しかけた。
「すもも…。すもものおかげで、私はやっと、本当の小説が書けたようだ」

「それは良かったですニャ」

気づくと、そこには、真黒いワンピースを着て、首にピンクのリボンを巻いた少女が、満面の笑みで笑っていた。
「え……？　すもも？」
驚いてごしごし目をこすると、そこにはそんな少女などいなくて、当然ながら、黒猫のすももが座っていた。
一瞬現れた、人間の頃だったすももは、目の錯覚だったようだ。
でも、不思議と、猫であったとしても、人間であったとしても、すももとは心が通じ合っている気がするのだった。

だからきっと、誰よりも喜んでくれているはずなのだ。
西野が本当の意味で小説家として歩み始めたことを。

＊＊＊

これから西野は、たくさんの物語を紡いでゆくだろう。
しかし、以前書いていたような、無機質で、人の心が感じられないような小説は二度とかくまい。
どんな作品を書いたとしても、必ずそのひとつひとつに、すももがくれた贈り物を、そっとしのばせるのだから。

エピローグ（後書き）

最後まで読んでくださった方、本当にありがとうございました！
感想・ご意見・質問等、なんでもお待ちしております。
かなり励みになります。
よろしくお願いいたします。

詳しいあとがきは、個人のブログの方に載せました。
イラストなんかもありますので、お時間あって、ちょっと興味ある
な、なんて方は、是非ブログのほうにも遊びにきてくださいませ。
ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｌｏｖｅｃｈｅｒｒｙｓ／
→がブログのアドレスになります。

それでは、また会える日まで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7566s/

すもももももももものうち

2011年9月24日08時15分発行